

1950年代、大阪のとある町にて。

「あーあ、もう切れなくなっちゃった。」

オカダヨシオは、ナイフをほうりだした。

印刷工場では紙を裁断する仕事が多いのだが、大量に切っているとナイフはすぐに切れ味が悪くなってしまう。

カミソリを使うこともあるが、むきだしの刃を持って切るのは危ないのであまり好きではない。

オカダはしかたなく、ナイフを砥石で研ぎはじめた。その横で、先輩がナイフを

ぽいとゴミ箱に投げこむのが見えた。

オカダがそれを見とがめるような気配を感じたのか、先輩は言いわけのようにつぶやいた。

「いちいち研ぐのはめんどうだからな。」

「そうですね。」

オカダはそう言いながらも、もったいないなと思っていた。でも、たしかにナイフを研ぐのはめんどうくさいし、またすぐに切れなくなってしまうし……。

そんなある日のこと。

家に帰るとちゆう、オカダは道ばたに座りこんで作業をしているくつ職人にふと目をとめた。職人は、大きめのガラス片でくつ底のゴムをけずっていたが、不意に手を止めるとガラスを地面にたたきつけた。

パリン、と音がしてガラスが割れる。

職人は小さくなったガラス片を持つと、またくつ底をけずりはじめる。

（なるほど、切れ味が鈍くなったらああやって先をとがらせてるのか。ナイフも割

ることができたらなあ。

そのとき、オカダの頭にある場面が思い浮かんだ。

それは戦後まもなく、彼が少年だったころ——進駐軍のアメリカ兵たちがお菓子をかじりながら町を歩き回っている姿だった。

それが、あのガラスの割れる音と結びついたのだ。

（そうか。ナイフにもあんなふうに折り筋を入れられないか？）

オカダはこの思いつきから、切れ味が悪くなったら刃を折ることができきるカッターナイフを発明することになる。

きっかけは「切れ味が持続するナイフがほしい」という思い。そこに、たまたま見かけたくつ職人、かつて見た光景が奇跡的に組み合わせあって、世界的な発明品が生まれたのである。

刃が折れるカッターナイフのヒントになったのは2つのものだ。一つはガラス片を割って使うくつ職人。もう一つの、「あらかじめ筋が入っているお菓子」とは何だろうか。

オカダが思いうかべた「あらかじめ筋が入っているもの」とは、アメリカ兵がcaじっていた板チョコである。

岡田良男は「板チョコのように、ナイフの刃に筋を入れておき、切れ味が悪くなったら刃を折って使える」カッターナイフを着想。特許を取得すると、まずはメーカーに製造を持ちかけたのだが、当時は「折れる刃なんてダメだ」「売れるわけがない」と理解してもらえず、自ら製作を始める。刃自体はじょうぶでありつつ、折りたいときに折れる厚さでなくてはならない。また、折り筋の幅や角度が決まるまでにはかなりの苦労があったという。のちに立ち上げた会社「オルファ」は「折る刃」から名づけられた。



ただより高いものは ない？

危機↓逆転？

20世紀初頭。アメリカのとある町にて。

汽車から降りてきたジャックは、駅の水飲み場の前に立つと目を丸くした。

「あーあ、どうなってんだ。ここも使用禁止かよ！」

すかさずジャックのそばにやってきたのは、近くで雑貨店を営むベンである。重そうなカゴの中からコーラのびんを取り出すとジャックの目の前にさしたす。

「よう、ジャック。コーラはいかがかね？」

「水ならタダなのになあ。しょうがない、1本もらうよ。」

ベンは5セント硬貨を受け取ると、センをぬいてコーラをわたす。

ジャックはのどを鳴らして生ぬるいコーラを飲みほした。

「ああ、生き返ったよ。汽車の中の水飲み場も使用禁止でな。のどがカラカラだったんだ。」

ベンはニヤリと笑った。彼はそれを知っていたからこそ、わざわざコーラを売りに出かけて来たのだ。

「ジャック、もうタダで水は飲めないぜ。今、結核がはやってるのは知ってるだろう？ 水飲み場のコップが菌を広めてるらしいんだ。」

当時、アメリカでは無料の水飲み場にブリキのコップが置かれていた。これをたくさんの人が使い回すことが結核菌を広める原因だとわかり、続々と水飲み場が使用禁止になったのである。

「うへえ、不便な世の中だなあ。これまで、水はタダでいくらでも飲めたのに。」
ジャックは肩をすくめた。

たまたま2人のそばにいてこの会話を聞いていたローレンスは、キラリと目を光

らせた。彼は弁護士で、発明家でもある。

（これは大きなビジネスになるかもしれないな。ジャンジャン水を売ってもうけるぞ！）

これまでタダで水を飲んでいた人々がはたして水を買ってくれるのだろうか。ローレンスは水を飲むためにあるものを開発したのだが、それは何だろうか。